
FIVE SQUARE

京ヶ一井蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FIVE SQUARE

【Nコード】

N2395C

【作者名】

京ヶ一井蛙

【あらすじ】

当小説は異色の学園ポーカー小説「FIVE SQUARE」として連載を続けてまいりましたが、この度普通の？学園小説「KILLINGMEHARDEST」として一から書き直すこととなりました。これに伴いこちらは現在掲載中の#11をもって連載終了とさせていただきますが、自らへの戒めのため削除はせず公開続行いたします。KILLINGMEHARDESTとの共通点、相違点を楽しむのもいいかもしれません。（京ヶ一）

#1 プロローグ

何故、俺はここにいる。

何故、この勝負を叩きつけた。

少年は、これまでの全てを遥かに凌駕する恐怖の中にいた。
負けたら退学処分だから？

違う。

相手が底の見えぬ生徒会副会長、いや新生徒会長だから？

違う。

すでに2ゲームを落とし、後がないから？

それすらも違う。

少年が戦っていたのは得体の知れないゲームだった。

正直、ただのポーカーだと思っていた。今はすでに肩書きに元が付
こうとしている現生徒会長の田河と練習した時も、それは単なるポ
ーカーだった。

果たして、ファイブスクウェアという名の変則ポーカーが始まって
みれば、少年はまごうことなき“勝負”の中にいた。

ファイブスクウェア。

それはこの私立五条学園で古くから行われていた“勝負”だった。
今、目の前にいる対戦相手であり、新生徒会長の大江は言っていた
が、これは本当にプレイヤーの精神力を根こそぎ奪っていくゲーム
だった。

いや、ゲームなんて生易しいものですらない。

少年は、己の呼吸が異常に荒くなっているのを自覚していた。
何かに押し潰されそうになっているかのような心境だった。

少年は、昨日のことを思い出していた。

何故、あんなにも簡単に、大江に勝負を挑んでしまったのだろう。目の前で、大江が田河に圧勝する様を目撃したというのに。

困り果てた少年は家に帰った後、唯一の家族である祖父に無謀な勝負を申し出たことを打ち明けた。

それを聞いた祖父はしばらく天井を仰ぎ見た後言った、やってみな、逃げずに、やってみな、と。その時の祖父は、眩しいほどに笑顔だった。

「カードの交換も終わった。ショウダウン勝負の時間だ」

大江は、言った。いつもと変わらぬ、冷たさを持った表情で。

少年は、身の震えすら始まっていた。

「大江！」

少年の後ろにいた田河が叫ぶ。

「もういいだろう、この勝負、無効にしてやってくれ！」

「無理だ」

「犠牲になるのは私だけでいい！ この通りだ」

「無理だ」

深々と頭まで下げる田河を一蹴する大江。

「ファイブスクウェアとは勝負を宣言した以上それをなかったことにすることはできない。例え、どのような謝罪があったとしても。

もちろん、土下座をされてでも」

まさに土下座を始めようとした田河は、それを聞きそのまま膝を落とした。

「それが、ファイブスクウェアだ」

大江は、残酷に言い放った。

「大江……」

田河はうつむいたまま弱々しく言葉をこぼす。

そこに、強く、頼もしかった女生徒会長の姿はすでになかった。

「私は、信じていたよ。君がいつまでも私の右腕にいてくれることを。君は、私にとって良き友人であつたはずなのに」

大江は、冷めた眼光で言い返した。

「僕も失望した。田河、お前がこんなにも弱くて脆いとは」

田河は、悲しみと悔しさで、齒を食いしばりながら涙をこぼし始めた。

「もう、終わりにしてやろう」

大江はそう言つと、己の手札をさらけ出し始めた。

まず、チェンジせずに残した4枚のカードを順にオープンする。

クラブの4、クラブの7、クラブの9、そして、クラブのK。^{キング}

大江は言つた。

「これは信念のゲームだ。強い信念があればカードは決して裏切らない」

交換して得た最後の一枚を開ける。

ファイブスクウェアはベットが不要であり、そのためチェンジしたカードはショウダウンの時まで大江を含めた全員がその中身を知らない。

だが、大江には確信があつた。そのカードの中身は。

「クラブのA！^{エース}」

大江が叫んだ。それは、フラッシュの達成を意味していた。

「さあ、お前もカードを開けるんだ。もちろん、フラッシュ以上ならお前の勝ちだがな」

大江が言つた。勝利の確信を込めて。

少年は、まだ己の中で自問を続けていた。

何故、俺はここにいる。

何故、俺はこの勝負を受けた。

何故、俺はこんなにまで追い詰められている。

何故…、俺は、今、笑っている！！

「何が、おかしい？」

大江が訊く。

少年は、言った。

「ここから、ここから…、勝負ですよ生徒会長殿！！」

#2 勝負解禁編1

5月28日。東京は水道橋にある私立五条学園の第2パソコン室。二人の男子生徒が書類の作成に追われていた。

「おいアタック！ 他の部員はどこ行っただ、このクソ忙しい時につ！」

軟式パソコン部部長の三田はキーボードを猛烈な勢いで叩きまくりながら唸った。

「忙しくなるから今日はみんな来ないんじゃないですか？それに部長が一日踏ん張れば書類完成しますからね。ていうか俺のことアタックって呼ぶのやめてくれますか」少年はモニターから目を離さず三田の言葉に応える。

「おのれーっ！ウチの部員は俺様のこと何だと思ってるんだー！」

「我等がヘタレ部長」

「にゅーん！！！」

少年に即答された三田はよく分からない奇声を上げる。

「部長、変な声出してないでとつと書類仕上げちゃいましょう」

「分かつとるわ児玉清！」

「その呼び方も止めてください……」

コンコン、とドアを叩く音がかすかにしたかと思うと、少年の幼なじみの同級生である菊池が教室に入ってきた。

「ナオキ、例のアレできてる？」

「ああヒトエちゃん、ちょっと待ってて」

少年はそう言つとマウスをカチツと鳴らし、同時に型の古いプリンタがういーん、と大きな音を鳴らし始めた。

「はい、ちゃんと昨日リストアップしといたよ」

少年はそう言つと、印刷物の束を菊池に渡す。

「サンキュ、ナオキー。あ、三田さん、こんな時に来ちゃってすみません」

菊池が三田に軽く頭を下げる。

「ああ、気にしないでいいよ仁枝ちゃん。で、それ何印刷したの？」

「山手線沿線のスイーツのお店のクーポンです」
少年が答える。

「へえー、ああ、そう言えば東京ドームのレストランにすっげえジヤンボなデザート出してくれるところあるんだよ。今度俺様と行ってみない？」

「結構です」

「うげあ」

三田のお誘いを菊池は一蹴する。

そんな時、ぴんぽんぱんぽーん、と呼び出しのチャイムが鳴った。

「2年9組、菊池^{きくち}仁枝^{ひとえ}さん、至急、職員室までお越しください…」
それを聞いた菊池は一瞬、体をびくつかせた。

「ヒトエちゃん…？」

不思議に思った少年が訊く。

「ん、ああ、呼ばれたからいかなくちや…、コピーありがとね」

菊池はそう言っと、パタパタと小走りに教室を出ていった。

#3 勝負解禁編2

「いやー、いつ見てもカワイコちゃんだよねー、仁枝っちは」

三田は相変わらず手はキーボードを連打しながらも顔を二ヘラとさせている。

「オヤジみたいなこと言っていないでしっかり作業してください。はい、俺の分終わりました」

少年はそう言って書類を印刷し、三田に渡す。

「おおー、できたか。安心しろ、俺様もあと368秒で完了するぜ！」

「素直に五分くらいと言ってください」

少年は相変わらずな三田に頭を抱えた。

「ところでアタック、仁枝っちって家が隣の幼なじみなんだろう？
てゆうことはアレだ、毎日朝起こしに来てくれたり」

「しません」

「毎日、今日作りすぎちゃったのー、とかいってお弁当くれちゃったたり」

「しません」

「じゃあアレだ、夜アタックが勉強してたら窓が急に開いて仁枝っちが入ってきて、遊びにきちゃった、なーんてことも」

「し、ま、せ、ん！　そもそも俺の部屋もヒトエちゃんの部屋も南向きだからそのシチュエーションあり得ないです！」

「あらま、ざーんねん」

三田は少年をからかいながらも書類のまとめに入っているようだった。

少年は仕方ないので三田の話に付き合ってやることにした。どうせ話しても作業スピード変わらないからこの人は、と。

「ま、部長にはヒトエちゃんは無理っすよ。なんたって2年の間で

は一番人気の娘ですから」

「うるへー！ うるへー！」

三田は口をこれでもかというほど尖らせる。

「埼玉に住んでる古いダチがさ、パソ部って案外女子入るぜーってゆーから期待してたら結局ウチには二人しかいねーじゃねーかよ！」

「二人いればいい方なんじゃないですか？」

少年があきれ顔で言う。

「しかもその二人のうち一人は幽霊みたいな女でもう一人は幽霊部員ときたもんだ！」

幽霊みたいな女とは2年の夏目、幽霊部員とは同じく2年の与謝野のことだが、三田のその言葉に少年は首をかしげた。

「あのー部長、与謝野は男なんですけど」

「いや認めん、あんなかーわいい顔しといて男子とは勿体無さすぎるわー！」

確かに与謝野は女子とみまごうほどの綺麗な顔立ちをしていたが、まさかこのバカは本気で与謝野を女だと思いこんでいるらしい。

「くつくつく、いつか暴いてみせる…、あの制服を脱いだら鼻血もののナイスバデーが」

「ないない、絶対ない。ああ見えて与謝野ってかなり喧嘩強いっすよ」「いやん、暴力反対」

暴力以上に危険なこと言ってる人に言われたくない、と少年は思った。

「あれ、それじゃ副部長の有島さんは？」

副部長で3年の有島こそそれっきとした女子のはずだが。

「ああ、あんなゴリラでドンキーコングな奴は女子から除外」

「ひでえ。有島さんも美人じゃないですか」

「ちよつとぐらい顔良かったってあんな暴力者じゃだめー。奴こそ制服脱いだらぴくぴく動く胸筋と六つに割れた腹筋と鬼の顔の様な背筋が」

その瞬間、教室のドアが派手に勢いよく開け放たれた。有島だった。

「三田くん？ 今、何の話をしていたのかなあ…？」

顔は笑っているが目が笑っていない。そして、彼女の背後にはよく分からないがもの凄いオーラが燃え盛っているようだった。

有島は三田にゆらり、と近づく。

「ひ、ひいひいー！」三田が悲鳴を上げる。

有島は笑顔のまま、三田を無言で殴打し始める。

「痛い痛い痛い痛い、やーめーてー！」

少年は、殴られまくっている三田に言った。

「部長ー、もうすぐ368秒経ちますよー！」

#4 勝負解禁編3

少年は有島に殴られ過ぎて顔がばんばんに膨れた三田から完成した書類を受けとると、生徒会室にその書類を持っていった。

生徒会室に着くと、少年はコンコンとドアをノックする。

返事がない。代わりに、生徒会室の中が妙に騒がしい。

「すいませーん、文化祭の書類持ってきましたー」

少年はそう言いながら部屋に入る。

生徒会室には妙な空気が流れていた。生徒会長の田河が厳しい表情で副会長の大江を睨んでいる。その大江の隣には英語教師の宮沢がいた。

大真面目でストイックなイメージの強い大江と、ボサボサ頭でいつも眠たそうにしている、暇があれば東京ドームのゲームセンターに入り浸っている宮沢の組み合わせは学園の誰が見ても首をかしげたくなるものだった。

「宮沢先生！」

田河が宮沢に向かって叫ぶ。

「即刻、今の発言を撤回していただきたい！ あろうとか、副会長をそそのかすなんて！」

田河が激昂している。極めて珍しい状態だった。

一方、宮沢の方は相変わらずのニヤニヤ顔だ。

「そそのかしただなんてそんな。俺はね、大江君がファイブスクウェアについて訊いてきたから答えてあげただけだって」

「ですからファイブスクウェアとは何ですか！ 勝負に勝てば願いを叶えられる？ そんな明らかなデタラメを言うのは止めてください！」

ファイブスクウェア…？ 少年はその言葉を聞いたことがあるよう

な気がして自分の記憶を遡ってみるが、思い出せない。

宮沢は反論した。

「冗談じゃないっての！ ファイブスクウェアってのはこのガッコに古くから伝わる実在の勝負事なんだよ！」

「信じられませんが、撤回を！」

「無理！ もう大江は勝負を宣言しちゃったから誰もこの勝負取り消せないんだよ！ そのこともちゃんとか校則の完全版に書いてある！」

確かに、生徒手帳に書いてある校則はごく一部で、それとは別に校則関連の全てが書かれている分厚い本が図書室や生徒会室などに置かれていた。

「小杉書記！ 校則完全版をここに！」

「は、はい！」

田河は2年の書記、小杉に命令する。手元に校則を置くと、田河はパラパラとページをめくる。そして、見つけた。非常に見つかりにくい場所に書かれていた、“ファイブスクウェアについて”。

さらに読み進めようとした田河に、宮沢が携帯電話を投げ渡した。すでに、通話状態だった。

「出てみな。お前のよく知ってるお方がお待ちかねだ」

田河は、電話に向かって話し始める。

「もしもし、田河で」

田河の言葉が途中で切れる。彼女の顔が驚愕に歪んだ。そして、絞り出すように言った。

「学園長」

#5 勝負解禁編 4

しばらくの会話の後通話を終了し、田河は宮沢に携帯電話を返す。

「何て言ってた？ 学園長は」

宮沢の質問に田河は極めて苦い表情で答えた。

「生徒の模範として…、ファイブスクウェアを受けてやってくれ、と」

「だろ？ …それじゃすぐに勝負を始めるとするが、お前、ポーカー知ってる？」

田河が、基本ルールなら、と答えると宮沢はテーブルにあった校則完全版を手にとった。

「じゃあ俺がファイブスクウェアについて説明してやろう」

ファイブスクウェアってのはうちの学園で作られた一対一で戦うオリジナルルールのポーカーだ。

と言っても基本的にドロウポーカー、つまり日本で一番有名な、五枚のカードを一度だけ交換して勝負するヤツだ。

普通のドロウポーカーと違うのは二ヶ所ある。

一つは勝負は五回制で、三本先取したプレイヤーの勝ちだ。どんな手で勝とうが、同じ一勝になる。五枚のカードで五回勝負するから五の二乗、ファイブスクウェアというらしい。あと、ファイブスクウェアでは絶対に引き分けにはならない。これは一組52枚のランプを使うのと、両者が同じ手だったら数字やマークが強い方の勝ちになるルールだからだ。

もう一つはファイブスクウェアにはベット、賭けを行う場面がない。学生のやるゲームだからな。だから本当に三回の勝ちを狙いに行くことだけがこのゲームの目的となる。…実に健全だろ？ もちろん、ベットがないからって駆け引きができないわけじゃない…。

「こんなところかな？」

宮沢が説明を終える。

「いきなり勝負を始めるほど俺も大江も鬼じゃない。1セットだけ練習させる時間をやろう。好きに相手を選べ」

そう言つて宮沢は椅子にどっかりと座り、タバコを吸い始める。

田河は仕方なく練習相手を決めることにする。

「この中にポーカを知っている者は？」

田河が生徒会メンバーに訊くが、誰も首を縦に振れない。

そんな時に、少年は手を挙げてしまったのだ。これが、一ヶ月の長き闘いの始まりになるとも知らずに――。

「俺が、やりましょうか」

「君はポーカを知っているのかい？」

「ええ、iアプリとかでたまにやりやし」

田河の質問に少年は答える。

「それじゃあ、悪いけど私と勝負してくれないか。練習だから気楽にやってくれていい」

「分かりました」

田河は宮沢の方を向き、言った。

「宮沢先生、練習に使うトランプを貸していただけますか」

「ああ、俺は持ってないよ。安心しな、トランプはディーラーが持つてきてる。せっかくだから練習試合もディーラーにカードをきつてもらふことにしよう」

「ディーラーは、どちらに？」

田河が訊く。

「もうこの部屋の前に来ているさ」

宮沢の言葉通り、ドアのガラス越しに人影がいつの間にかあるのを確認できた。

「おい、入ってきていいぞ！」

宮沢が人影に向かって叫ぶ。ドアが、開けられた。

「な……！」

その瞬間、少年は我が目を疑った。

ディーラーとして入ってきたのは、本格的なディーラー服に身を包んだ、怯えた目の菊池。

#5 勝負解禁編4（後書き）

久々にゴリゴリ小説を作っているケイガイチです。ガイチさんとも読んでください。さて、とりあえず五回までアップしたファイブスクウェアでござーますが、いかがな感じでしょうか。お気軽に感想など送ってくださいな。さて、物語の方はまだまだまださわりの方なんですけど、こないだ、この小説のラストがまとまりました。そこまでたどり着けるように引き続きゴリゴリ書いていきます。そう、本性を表した三田部長に挑んでいく主人公のナオキ君達のラストバトルが書けるまで…！ 噓つき

#6 勝負解禁編5

「ヒトエちゃん…?」

少年は絶句した。菊池が、ディーラー? 菊池をよく知る少年にも、寝耳に水の事実であった。

少年と菊池の目が合う。

「ナオキ…」

菊池の様子がおかしかった。目にうつすらと涙を浮かべ、明らかに彼女が恐怖におののいているのがうかがえた。

「彼女はね、ディーラー特待生だよ。…入学試験の面接を覚えているか?」

宮沢が口を開ける。

この場にいる2年の全員が思い出した。入試面接であった奇妙な光景。

「君、ちょっとこれをきつてみてくれないかい?」

少年は面接の途中、面接官の教師から一組のランプを渡された。ジョーカーのない52枚のカード。少年は奇妙に思いながらもカードをきる。

「すまないね。何でもないから気にしないでいいよ。そう、手先の器用さを見るためのものだから」

手先の器用さを見るため、など単なる口実だった。宮沢が真実を語る。

「ファイブスクウェアのディーラーは完全に公平なカード配布と、カード捌きの美しさが必要だ。逆に言えば、その2つさえ満たせばディーラーになれる。3年に一度入学試験の面接で新たなディーラーを選出していたのさ、そして、栄えある20人目のディーラーに

選ばれたのが…、彼女だった」

宮沢が菊池を指差す。

「授業料全額免除と引き換えに、3年間ディーラーとしての役目を全うしてもらう。そして彼女は、過去のディーラーと同じように、このファイブスクウェアの『全て』を叩き込まれた。ファイブスクウェアの歴史、存在意義、そして公正に、マシンのように勝負を進行するという使命」

少年は菊池の異変が、その教え込まれた「何か」によるものだと悟る。彼女は、何を知ってしまったのか。

「さ、ディーラーとしての初仕事だ。ファイブスクウェア自体も2年ぶりの実施だ。最近誰も勝負吹っかけてくれなくて退屈してたところだ、よろしく頼むわ、菊池さん？」

「は、はい…」

菊池が弱々しく返事する。

4つの机を並べ、椅子を両サイドに置く。簡素な、バトルフィールドの完成だった。

田河と少年がその椅子に腰掛ける。ちょうど2人との距離が同じになるように菊池が立った。

勝負者がこの2人であることが分かり、菊池はさらに狼狽したようだった。

「まさか、ナオキが、ファイブスクウェアを…？」

#7 勝負解禁編 6

「ち、違うつて！ 俺はただの練習台だから」

少年がとっさに弁解する。

「でも、ヒトエちゃんがディーラーだなんて知らなかった、どうしてこんな重大なこと黙ってたんだよ…」

続いて少年は菊池に訊いた。制服を着ている生徒たちとくたびれたスーツを着た宮沢がいる生徒会室で、夕日に映えるディーラー姿は明らかに異質であった。

菊池はうつむいていた。その視線は手元にあった一組のトランプにあった。

「相談、など誰にもできなかつたからさ。このオシゴトはな、お前たちの想像をはるかに超えた代物なんだよ」

部屋の隅に腰掛け、ぷかぷかタバコを吸っていた宮沢が言う。

「そんな…」

少年は愕然とした。菊池はその”想像をはるかに超えた”使命を課せられながら普段の高校生活を送っていたのだ。そぶりなど、今日第2パソコン室で一瞬だけ見せたあの時を除けば、一切なかったのだ。

少年や、生徒会員たちに不安が高まってきたのを察知した宮沢は、極めて明るく弁解してみせた。

「なーに変なこと考えてんだよチミたちは！ 別に彼女はフツーにカードきってるだけ！ それだけの仕事だっつーの！ ホラ、菊池さんももつとにこやかに明るく！」

「先生、ディーラーはマシンのようにゲーム進行するのでは」

宮沢の隣で煙に耐えながら状況を見つめていた大江が宮沢に突っ込んだ。

菊池はすう、と一度深呼吸すると顔を上げ、カードをきり始めた。
シャッシャッシャッ、パラパララ…と小気味いい音が鳴る。

菊池のシャッフルは、確かに美しく、見事だった。ただ、カードをきっているだけに、トランプの1枚1枚が生命を与えられたかのごとく、舞った。

そして、そのうちから少年と田河に1枚ずつ交互に計10枚、配られる。10枚のカードは2人に目掛けて地を這っていき、それぞれの目の前で停止した。

「ああそうだ、ファイブスクウェアのディーラーって勝負中は一切喋っちゃいけないことになるから、今日は特別に俺が解説してやるよ。…それじゃ2人ともカードをオープンしな」

宮沢に言われ、少年と田河は自分だけに見えるようにカードをめくる。

#7 勝負解禁編6（後書き）

本日より連載再開です。とりあえず次回より第1章の第1戦、「主人公VS田河」の開始です。

#8 勝負解禁編7

少年は自分に与えられた5枚のカードを確認した。

スペードの5、ダイヤの7、クラブの2、ハートのJ、^{ジャック}スペードのK^{キング}…。

揃っていない。見事に揃っていない。このばらばらな手札を、どうしたものか。

少年は田河の方をちらりと見る。田河は5枚目を開けた時に、ぴくりと顔をこわばらせたように見えたが、それも一瞬ですぐ元の落ち着いた表情に戻った。

少年と田河がどのカードを交換するか思考していた間、たださえ静かだった生徒会室はますますの静寂に包まれた。あまりの静けさに宮沢が業を煮やす。

「あー、もう、2人とも駆け引きしてもんがなっちゃいねえぜ！両者だんまりじゃただのカード遊びで終わっちゃうじゃねえか！」

だが、対人ポーカーなど経験のない2人はどう振る舞えばよいのか判らない。少年が言う。

「いや、いきなり駆け引きと言われてもどうすればいいか…」

宮沢は少し考えた後、言う。

「例えばな、お前のカードは今、ワンペアにも満たないダメハンドだったとする」

少年は偶然にも今まさにそんな手札だったため一瞬どきりとしたが、顔には出さずに済んだ。宮沢が続ける。

「そこでだ、そんな時には『俺は今ツーペア揃ってるぜ！』とか『あと1枚でストレートになるぜ！』とかハツタリかましてみるのさ。それだけで相手には多少の脅威になる」

「はあ」

「その逆で、いい手が揃ってたり揃いそうになってる時に渋い表情

をしたりすれば、相手に『こいつの手はたいした手じゃないな』と思いい込ませることもできる。ただし、演技が下手だとかんたんに見破られるぜ」

何も言わないのもつまらないし、せっかくだから嘘の手札を言ってみようと思った少年は、思い切って高い手札ができていると宣言することにした。

「それじゃ…、今俺がどんな手になっているか言ってもいいですか」少年は田河に向かって言い、田河も「どうぞ」と許可する。

少年は深呼吸すると、宣言した。

「お、俺は今…、5のフォーカードができていますよ！」

普段は嘘などめったにつかない少年にとって、一世一代の大嘘をついてみせた瞬間であった。部屋中がざわつく。ポーカーのルールがよく分かっている生徒会メンバーも、少年が上位の手札ができていることを宣言してしまったことは理解できた。

「ははっ、また大きく出たもんだな！ ホントにできてんのか？」笑う宮沢に、少年はむきになって言う。

「できてるにきまつてるじゃないですか！ 今ここには、4枚の5のカードが」

「それはない」

少年の言葉を、田河がさえぎった。

#9 勝負解禁編8

「へ？」

少年の目が点になる。田河はすかさず言った。

「5なら、1枚私が持っている」

そう言つて、田河は自分の手札のうち、1枚を晒して見せた。ハートの5。

ファイブスクウェアでは1組52枚のトランプを使用しているため、ハートの5が2枚あるということはあり得ない。すなわち、少年のブラフが暴かれた。

「はっはっはー！ 簡単に嘘がバレちゃったなおい！」

少年は宮沢に盛大に笑われる。…ハッターなんかするんじゃないかな。つた。

「…4枚チェンジ！」

少年はスペードのKのみを残して、残りは全て捨てた。ブラフが無駄になったのなら、真っ向勝負で行くしかない！

「2枚チェンジ」

田河は手元に3枚残した。フラッシュカストレートができかけているのか、スリーカードか、それともこれもハッターなのか…。少年には予想ができない。

シャツシャツ、とまた良い音を立ててカードが菊池より二人の元に送られる。この時点でお互いの手元にある5枚ずつのカードで勝負することになる。

「さあ、2人ともカードを開けていきな。一応同時に1枚ずつオープンしていくのがファイブスクウェアでの基本となっているが、必ずしもそうする必要はない。…まあ、今日は基本通りでいいんじゃないか」

宮沢に言われ、2人は1枚目に手を掛ける。

1枚目のオープン。少年は残しておいたスペードのKを開ける。
田河はダイヤの8。

2枚目のオープン。

少年はK来いK来い、と念じながらまだ中身の分からぬ2枚目を開ける。中身はクラブの4。田河はスペードのA。

3枚目のオープン。少年の願いもむなしく、中身はスペードのJ。
田河はここで先に見せていたハートの5を開ける。

4枚目のオープン。少年は引き続き願いを込めてカードを開ける。
中身は、ハートのK。ここで、ようやくワンペアが完成した。ところ
ろが、

「クラブの5」

田河が、自分の4枚目のカードを音読する。田河もここでワンペアとなった。

最後の5枚目を同時にオープンする。

田河のカードは、ダイヤの5であった。

「最初の時点で5のスリーカードができていたんですね……」

少年がつぶやく。

「そう。だから君の手元には最高でも5が1枚しかないことは判っていたよ」

田河が静かに言う。

少年は最後の5枚目がKならば同じスリーカードでも数字の大きい少年の勝ちとなったが、そう都合のいいカードが来ることもなく、結果はクラブの6。第1ゲームは田河が先取した。

#10 勝負解禁編9（前書き）

当作品を読む上でのヒント。

当作品は、「後書きまで作品の一部です」。

それでは引き続きお楽しみください。

#10 勝負解禁編9

引き続き、勝負は第2ゲームへと進む。

菊池は第1ゲームで勝負に使われた10枚と、捨てカードの6枚を手元に戻すと、また目にも留まらぬ速さでカードをシャッフルしていく。しばらく続けた後、また1枚ずつ計10枚配る。

「そういえばナオキ君と言ったかな、君は」

静か過ぎるのも何だと思ったのか、雑談を始める田河。

「今日はどうして、生徒会室へ？」

「ああ、今日締め切りの文化祭の書類持ってきたんですよ。うちの部長、ギリギリまで書類溜め込むの好きなんで…、済みませんね」
「君の部は？」

田河に質問された瞬間、少年の頭に三田の忠告がよぎる。

『いいかアタック…、ウチの部は残念なことにその存在を誤解されている！ パソコン部はまともなパソコン部、そして我々軟式パソコン部はまともじゃない変態集団として認識されているのだ！ だから、ひっじょーに不本意ではあるが、校内では”パソコン部”として振舞うこと！ 解ったか児玉清！』

変態集団のイメージを確定させたのはアンタのせいだろ…、と思いつきながら少年は返答する。

「…パソコン部ですよ」

「はて、パソコン部の書類なら、先々週には受理しているが」

少年はぶつ、と吹き出す。パソコン部の書類を田河が目を通す前ならごまかせると思ったのに、そんなに前に出されていたとは！

「嘘はいけないな、本当はこの部だい？ パソコン部のお隣の天文部かな？」

少年は仕方なく、真実を言うことにした。

「…パソコン部で間違ってますね…。軟式ですけど」

部屋中がこの言葉だけでざわつく。少年に対する周りの視線に軽蔑が混ざり始まっているのが感じられた。…ああ、やっぱり言うんじやなかった。

が、言われた当の本人である田河は、ほんの一瞬体をぴくりとさせたが蔑視の表情は出ることなく、返事した。

「ああ、軟式の方のね」

「お騒がせしていつもすみません…。迷惑ですよね」

「い、いや、そんなことはない、少しくらい賑やかな方が楽しいんじゃないか。うん」

田河の様子がちよつとおかしい。少年は思った。ひょっとして、三田か有島あたりに変な弱みを握られてるとか？

「3枚チエンジ」

田河がここですかさずカード交換をする。

「じゃ、俺も3枚で」

少年も3枚を取り、テーブルの端に捨てた。

#10 勝負解禁編9（後書き）

ここに書くはずでした「#10後書き」は、長すぎるため#11として公開することにしました…。バカだろケイガイチ。

11 勝負解禁編 9 後書き（前書き）

10の本編の倍近くなつたため急遽# 11として登録しました
10の後書きでございます。

ウチの三田がご迷惑おかけしてます…。

#11 勝負解禁編9 後書き

はいども。ここまでで#10まで執筆完了いたしました。作者のケイガイチでございます。なかなか執筆のモチベーションが上がらなくて四苦八苦しておりますです。やっぱり孤軍奮闘は結構苦しいのじゃないかね。皆様の応援をお待ちしております。その応援が糧に、活力になります。

それにしてもポーカー描写というのはなかなか難しい。書きやすい題材として選んだものの、矛盾点はないかとかどうしたら読みに面白くなるかとか、奥の深いこと深いこと。何だか、三田ぶちよー関連のポーカーに関係ないシーン書いてる時が一番すんなり書けてるんだよねあ。

「呼んだ？」

で、出たー！三田部長出たー！

「ああ出るともさ！作者とも会話してやるさへへへへん！」
何しに來たんだ人が話してる時にっ！

「まず一つ言いたいことがある。俺様を出せ。本編に」

無理。これからポーカーシーンが続くの。お前が出る幕無し。

「ひでー！ だったら俺様がポーカーやったらあー！」
無理。

「どうして」

お前のポーカー力、作中最低に設定してある。多分#4に出てきた小杉にすら瞬殺される。

「そんなチョイ役にいいいいいい！？」

分かったらおとなしくしかるべきシーンでバカやってりゃいいのさへっへっへ。

「おのれ作者め…。言いたいことはもう一つあるんじゃない！
何だべ？」

「この『小説家になろう』はカテゴリーが10個設定できるだろ。で、このFIVE SQUAREも10個設定してた」
うん。

「何故、カテゴリーから”三角関係”を消したーーーーー!」
あ、知りたい?

「おうよ」

この小説、悔しいことに2ヶ月連載が止まってたじゃん?

「そうだなヘタレ作者め」

うるさい! で、その2ヶ月の間に…、この小説の路線が変わったんだよ!

「なんだってーーーーー!!!」

セオリー通りの反応ありがとう。

「つまり、展開が変わることになったから”三角関係”の設定も削除と?」

当たり。

「ざけんなーーーー!」

…何を期待してたんだい? チミは。

「決まってるだろう! 俺様とアタックと与謝野の三角関係だ!」

何だそのカオスな三角関係ー!? 3人とも男じゃん!

「何度でも言ってる! 与謝野は脱いだらボンキュッボン!」

そんな設定作ってねえー!?

「で、どんな話に変更になるんだ」

言える範囲で言っと…、メインキャラ3人の三角関係から、メインキャラ2人の大恋愛に変更になった。その中にナオキ君が入っているかもしれないし、入ってないかもしれない。

「俺! 俺!」

お前が何故入るー!

「決まってる! 俺様と与謝野の」

却下。

「それじゃ、俺様と田河で勘弁してやる!」

お前を確定にするな！

「だって俺様田河の弱み握ってるんだぜ、うひひ」

確定してない確定してない！ しかもネタバラシすると、お前別に田河の弱み握ってないだろうが！

「ばらすなー！」

ったく、そのあたりのシーンも一応伏線になってるんだからあんまし言及しないように。分かった？

「ワタシニホンゴワカリマセーン！」

黙れーーーー！！

「くそっ、俺様が本編に出られないんなら、こうしてやるー！」

（と言って、ダッシュで立ち去る三田）

…どこ行っただ奴は。あ、帰ってきた。

「ぜー、ぜー、これで勘弁したる、ぜーぜー」

どこ行ってきたんだお前は…。別に何も変化は…、あ！

「ニヤリ」

この小説に変なキーワードを増やすなー！！ このケイガイチの小説に何てことをー！？

「というわけで、次回もお楽しみに！」

勝手に締めるなーーーー！！！！

#11 勝負解禁編9 後書き（後書き）

ちなみに三田部長が「キーワードの文字数制限がなかったら『セクシーで無敵！ 最強三田部長が大活躍で世界を救う』にするつもりだった」と申しておりました。

ふざけるなー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2395c/>

FIVE SQUARE

2010年10月9日12時11分発行